

武州高麗郡平松村梅松山觀世音由来の記

梅松山圓泉寺は觀音大士感通之靈場、天滿天神垂應之古刹なり。しかりといえども紀傳散失して考ふ可きに由無し。ここ古傳に曰く。人王五十三世、淳和皇帝天長中（八二四〜八三三年）吾が弘法大師奥州遊化之日、錫を此地に振り玉ふ。松柏檜杉蓋を傾け樓を構ふ。亦其の四望たるや、東は民屋村邑、簇々として遠く武野に接し。南は坐ながら土峯（富士）に對す。嶽腰の白雲、絶頂の積雪、千里一瞬なり。西は群巒奇峯壘々として遙かに武甲に連なり。北阜（きわ）田野開け黄雲天に連なれり。林中に老松有り。大きさ數十圍、枝條翳蔚として四隣を蓋す。葉上平かにして壘面の如し。寔に神仙人之棲遲（のんびりくらす）するに似たり。此の里を呼んで平松村と曰ふ。職めて此の由に、傍らに一株の梅有り、花葉敷榮して花を含み芳を吐く。鶯舌經を嚙じて人をして聞き樂しませんとして使しむ。梅松山と称する所以なり。實に圓通大士（弘法大師）鎮坐の靈場、攝化利生之勝壤なりと。旃によつて大師僅かに艸堂を締營して安するに、十一面大悲の金銅の唐像を以つて長五寸有餘、即ち點眼（開眼）供養し玉ふ。傍らに小院を建造して圓泉寺と名づく。大悲の圓海不渴ことを欲すればなり。爾して迺ち大士の靈異曰に新にして、瞻禮する者繩々として絶えず、鬱として巨藍と爲れり。爾來九百餘稔（年）を経て窪隆（盛衰）幾許ぞ乎。亦感應得益巨多なりと雖も、舊紀（旧記）無ければ載すること不能。

中古同郡に二強の盜賊有り。一りをば大寺五良兵衛と名づけ、一りのは小天狗四良兵衛と曰ふ。各々盜業に妙を得て四寸の竅（穴）を出入すと。一時寺に入りて、ひそかに法器を盜むに遅夜（終夜）境内を廻りて出ずることを得ず。或る時は大釜を盗んで負ふて行くこと三許里と謂ふ、曉天尚門境に在り。越に賊、寺主に對して懺（懺悔）していわく。慈悲過を恕し玉へ。重ねて更に入る不可。吾儕（われわれ）當寺を窺ふこと數度。先ずは堂縁に大入道を跨坐して怒眼瞋睨すること甚だ畏ろし。適入るを得ると雖ども齋ち去ること不能。吾等尚入らず、況んや自餘の小賊を耶と。長息陳謝して去んぬ。寺門郷邑古より今に至りて賊難有ること無し、皆擁護の致す所なり。

天正（一五七三〜一五九一年）中に圓祐闇梨（阿闇梨）と云ふ者有り。靈跡の荒廢せるを嘆き、中興の願いを發し、朝懺暮悔し香燈供養す。夕夢らく庭中松上に神人影現して、祐公（祐圓）に告げて曰く。我は是れ大政威眞天、即ち十一面救世者にして難事の汝の至誠を感じて、常に衛護を垂れる。久からずして願ふ所成すべしと。覺めて後、歡喜已まず。乃ち寶祠を締構して、菅神（天神）を勸請して鎮守と崇敬し如在の祭奠晝夜に怠ること無し。是を以て院宇の営功不年に圓就せり。

然して彼の松、年久ふして枯朽す。甲寅の秋に至つて一旦仆（たおれる）す。寺主秀慶松根うかがいて一のへいしを得たり。中石に紀して常盤樹翁居士と云々。年号等は磨滅して視えず、亦松を植えて舊蹤（古い事跡）を遣せり。其の嗣秀性先師の囑を承けて潤色之任を負ひ、精練苦修して修飾之功を属す。佛閣日々に映輝し、宗宇月々に嚴麗す。秀性惣ふに夫れ常磐樹翁居士と者、當山開基（円泉寺を開いた人）之檀越歟。しかし鋤婆を建てて遠く本願の冥福を薦めんにはと、新たに寶篋印石塔を造立して龍象を延び、法席を啓き、觀音の三昧を修めて追遠の資糧に充

維時 寶曆六（一七五六年）丙子

翌年丁丑の夏入間川に於いて一小石を拾い獲たり。黑白相交じり形勢宛も富士に似たり。古え石川氏之士峯石豈之に異ならん耶。因つて命づけて土峯と爲し、以て奇なりと爲して平日土峯拜之地に於いて、神祠を營構して石を社中に納めて御性禮と爲し。浅間大士を召請して、以て鎮護と爲し。持明の法味、（朝）夕欠かさず三蜜之法燈を五色の觀鏡を磨き、永く伽藍の牢固を祝し、鎮えに海内の安寧を禱る者也。

円泉寺観音堂御詠歌

吹く風も音静かなる泉寺いずみでら

千代もたえせぬ村の松が枝え

吹く風の音静かなる泉寺いずみでら

千代もかわらぬ法の灯のりともしび

埼玉県飯能市平松三七六番地

真言宗智山派 円泉寺

<http://www.ensenji.or.jp/>